

## 日本赤十字秋田短期大学看護学科卒業生の動向調査（第3報）

—卒業生による在学中の教育評価—

牟田 能子<sup>1)</sup> 伊藤美奈加<sup>2)</sup> 大高 恵美<sup>1)</sup> 三瓶 まり<sup>3)</sup> 佐々木理恵子<sup>4)</sup>

### Trend Survey of Graduates in Japanese Red Cross in Akita Junior College of Nursing (Third Report)

—Evaluation of education at school by a graduate—

Yoshiko MUTA Minaka ITOU Emi OOTAKA Mari SAMPEI Rieko SASAKI

#### 要 旨

本研究は、本学1期生から7期生までの卒業生を対象に、卒業時点での能力や態度の習得状況の満足と卒業後大切なこととして残っていることについての調査を行った。163名の回答が得られ、調査の結果より以下のことが明らかになった。

1. 在学中の能力や態度の習得状況に対する満足度は、「看護過程の一連の能力」と「専門職業人としての姿勢・態度」が高く、「論理的思考力や研究を展開する能力」が低かった。能力や態度の習得状況に対する満足に影響を及ぼした事項では、「臨地実習」が最も多く、次いで「講義」「カンファレンス」「教員」で、臨地実習での経験や教員との関係性の中で能力や態度が習得されていた。
2. 現在大切なこととして残っていることの調査では、「専門的知識・技術の大切さ」が最も高く「赤十字の理念」が最も低かった。

以上の結果から、今後、論理的思考力や研究を展開する能力に対する満足度がより高まるような教育方法の必要性が示唆された。

キーワード：看護教育、卒業生、能力、態度、教育評価

**Abstract :** This study was conducted to attempt an evaluation for nursing education at the Japanese Red Cross Junior College of Akita. Data was collected from 163 graduated students in the nursing department.

1. The result shows most students were satisfied in acquiring a professional attitude and clinical competence through the three year course. Nursing practice, lectures, group discussions and the faculty had an effect on the acquisition of competence and attitude.
2. However, they do not have a clear understanding of the Red Cross philosophy, logical thinking and nursing study. In is necessary therefore to investigate more effective teaching methods in order to elevate students' competence more satisfactorily.

**Key Words :** Nursing education, graduate, ability, manner, evaluation for education

---

看護学科 1) 講師 2) 助手 3) 助教授 4) 教授

本研究は平成17年度日本赤十字秋田短期大学共同研究費助成による研究の一部である。

なお、本研究は、第7回赤十字看護学会学術集会での報告に一部加筆・修正したものである。

## はじめに

日本赤十字秋田短期大学看護学科（以下、本学とする）の教育目的は、赤十字の理念である人道に基づき、豊かな人間性とすぐれた判断力を持ち国民の保健医療・救護・福祉の向上に寄与できる看護師を養成することである。そのため赤十字の理念を行動化でき、変化する社会の要請にこたえられる看護の基礎的能力を養うことを目標にしている。

開学後の教育課程の点検は平成15、16年に行い、平成17年には医療の高度化、情報公開等の社会的要請を受けて専門分野の強化や専門分野の均衡化を図るために教育課程の変更を行って来た。しかし、これまで学生からの学習状況の調査は行われていない。今回開学10周年を機に、本学の教育評価につながると考え、卒業生による在学中の学習状況の調査を行った。

第1報では、卒業生の9割以上が看護職として就職しており進学率や資格取得率は他の短期大学に比べ低いことが明らかになった。卒業生の3割は、卒業時点で専門領域から認定看護師、看護教育等の具体的な進路を見いだしていた。また、キャリアアップを視野に入れ就職先を選んでいる卒業生が多く、看護職の専門領域での今後の活躍が期待できると考えられた。

第2報では、社会人経験のなかった卒業生の約3割は看護師になることや学業の継続を諦めようと思ったことがあったという結果を得た。その理由として、特に臨地実習で「看護師に向いていない」と思った卒業生が多く、臨地実習での教育の在り方を検討する必要性が示唆された。

そこで第3報では、卒業時点での看護実践能力や態度の習得に対する満足と現在大切なこととして残っていることについて明らかにすることにより、本学の教育の評価や今後の教育の在り方についての示唆を得たので報告する。

## I. 研究目的

卒業時点での「能力や態度の習得状況に対する満足」と、本学で受けた教育で「現在大切なこととして残っていること」について明らかにし、卒業生の在学中に受けた教育の評価を得る。

## II. 研究方法

1. 対象：本学1期生から7期生までの卒業生543名のうち研究に同意が得られた293名。

2. 調査期間：平成17年10月～平成17年12月
3. 調査方法：留め置き法による質問紙調査。
4. 質問紙の作成

卒業時点で学生に習得してほしい能力や態度について、本学の教育目標、実習目標と短期大学の卒業生に対する卒業後の追跡調査に関する先行研究<sup>1) 2) 3) 4)</sup>をもとに検討した。能力や態度の習得状況は『卒業生から見た満足』として評価を得ることにした。また、能力や態度が卒業後も身に付いているかを知る為に『現在大切なこととして残っていること』を質問することにした。本調査に先立ちプレテストを行った。調査項目の回答形式は次の通りとした。

- 1) 能力や態度の習得状況に対する満足は、看護実践能力や態度を示す13項目の中から、満足を5、不満足を1とする5段階尺度を使用した。
- 2) 能力や態度を習得することに影響を及ぼした事項は、提示された事項（講義や実習等の授業形態や教員、臨床実習指導者、看護の対象者、自己学習等）の中から、能力や態度の習得することに影響が強いものを一つ選択する。
- 3) 本学で受けた教育で現在大切なこととして残っていることは、示された18項目の中から3つまでを選択する。
- 4) 本学卒業に対する満足は、本学を卒業して良かったと思うかについて「はい」「いいえ」「どちらともいえない」を選択する。

## 5. 分析方法

能力や態度の習得状況に対する満足は、5は5点、4は4点、3は3点、2は2点、1は1点の得点を与え、項目毎に平均値を求め満足度とし標準偏差を求めた。

「研究を展開する能力」について『卒業研究』履修の有無で比較した。

6. 倫理的配慮：本学卒業時の連絡先に調査目的・方法、匿名性の遵守や権利擁護、調査は卒業生の個人評価を目的とするものではないことを記載した往復葉書を送付した。同意の得られた293名に対して調査用紙を送付した。

## III. 結果

回答数は163（回収率は55.6%、有効回答数157）

表1 習得した能力や態度への満足

順位	習得した能力や態度の内容	←-----満足 -----→ 不満足					満足度(SD)
		5	4	3	2	1	
1	対象との人間関係を成立する能力 (コミュニケーション技術など)	14( 8.6)	54(33.1)	71(43.5)	20(12.2)	4( 2.6)	3.3(±0.9)
2	専門職業人としての姿勢・態度(責任感、主体性、協調性、リーダーシップ等)	15( 9.2)	47(28.9)	73(44.8)	25(15.3)	3( 1.8)	3.3(±0.9)
3	必要な情報を収集し、解釈・分析し看護上の問題を明確にする能力	13( 8.0)	48(29.5)	79(48.4)	21(12.9)	2( 1.2)	3.3(±0.9)
4	対象を身体的・精神的・社会的側面から理解する能力	9( 5.5)	54(33.1)	72(44.2)	25(15.3)	3( 1.9)	3.3(±0.9)
5	自己教育力(生涯を通して主体的に学ぶ姿勢)	12( 7.4)	47(28.8)	72(44.2)	25(15.3)	3( 1.9)	3.2(±0.9)
6	自己を評価する能力	5( 3.0)	28(17.1)	94(57.8)	29(17.8)	7( 4.3)	3.2(±0.9)
7	適切な看護目標を設定し、具体的な看護計画を立案する能力	11( 6.8)	44(27.0)	82(50.3)	24(14.7)	2( 1.2)	3.2(±0.8)
8	個々の看護技術を確実に展開する能力	7( 4.3)	42(25.8)	82(50.3)	26(16.0)	6( 3.6)	3.1(±0.9)
9	レポートを書く能力	8( 4.9)	41( 25.1)	78(47.4)	25(15.3)	11( 6.8)	3.0(±0.9)
10	他者の前で自分の考えや思いを発言する能力	8( 4.9)	32(19.6)	78(47.4)	37(22.7)	8( 4.9)	3.0(±0.8)
11	実施した看護について要点をまとめて言語で報告する能力	6( 3.6)	28(15.3)	89(54.6)	31(19.0)	9( 5.6)	2.9(±0.9)
12	物事を論理的にとらえ、客観的に思考する能力	5( 3.1)	25(15.3)	95(58.2)	29(17.8)	9( 5.6)	2.9(±0.8)
13	研究を展開する能力	2( 1.2)	13( 7.9)	68(41.8)	55(33.8)	25(15.3)	2.4(±1.0)

単位=人数(%)

であった。

### 1. 卒業時点での能力や態度の習得状況に対する満足度と影響を及ぼした事項

平均値が3.0以上の項目は10項目であった。上位4項目をあげると、「対象との人間関係を成立する能力(コミュニケーション技術など)」、「専門職業人としての姿勢・態度(責任感、主体性、協調性、リーダーシップ等)」、「必要な情報を収集し、解釈・分析し看護上の問題を明確にする能力」、「対象を身体的・精神的・社会的側面から理解する能力」全て3.3±0.9であった。

平均値が3.0未満の項目は「研究を展開する能力」2.4±1.0、「物事を論理的にとらえ、客観的に思考する能力」2.9±0.8「実施した看護について要点をまとめて言語で報告する能力」2.9±0.9の3項目であった。(表1)

満足度の平均値が最も低かった「研究を展開する能力」について『卒業研究』を履修した卒業生(1期生から5期生まで)と履修していない卒業生(6、7期生)とで比較すると、前者の平均値が2.6、後者の平均値は2.2であった。(表2)

満足に影響を及ぼした事項の上位項目は「臨

地実習」669(33.1%)、「講義」316(15.6%)、「カンファレンス」187(9.2%)、「教員との関わり」167(8.3%)であった。

下位4つは「ゼミナール」16(0.8%)「コミュニケーション演習」42(2.1%)「自分の興味や関心」45(2.2%)「スタッフとの関わり」54(2.7%)であった。(表3)

### 2. 本学でうけた教育で現在大切なこととして残っていること

上位項目は「専門的知識・技術の大切さ」49名(10.0%)、「対象を個別的に理解することの大切さ」48名(9.8%)、「礼儀・挨拶や言葉遣いなど基本的なこと」38名(7.7%)「対象との人間関係の大切さ」36名(7.3%)、であった。

下位項目は「赤十字の理念」8名(1.6%)、「対象をありのままに受け入れること」10名(2.0%)、「専門性を高めるための努力」14名

表2 卒業研究履修の有無による満足度の比較

N=160

卒業研究履修の有無	有 n=97					無 n=63	
	1	2	3	4	5	6	7
期生							
満足度	2.6	2.8	2.4	2.7	2.5	2.2	2.2
満足度の平均値	2.6					2.2	

表3 能力や態度の習得に影響を及ぼした事項（複数回答）

習得した能力や態度	影響を及ぼした事項														
	講義	コミュニケーション演習	看護計画演習	学内演習	臨地実習	カンファレンス	教員との関わり	スタッフとの関わり	対象との関わり	卒業研究	ゼミナール	自己学習や努力	自分の興味や関心	その他	合計
人間関係を成立する能力 (コミュニケーション技術など)	18(11.2)	32(20.4)	0	1(0.6)	66(42.1)	4(2.5)	3(1.9)	5(3.2)	23(14.7)	1(0.6)	1(0.6)	0	2(1.3)	0	157(100)
専門職業人としての姿勢・態度(責任感、主体性、協調性、リーダーシップ等)	21(13.2)	0	0	3(1.9)	72(45.3)	4(2.5)	16(10.1)	18(11.3)	8(5.0)	0	0	7(4.4)	9(5.7)	1(0.6)	159(100)
必要な情報を収集し問題を明確にする能力	25(15.9)	0	47(29.9)	6(3.8)	59(37.7)	3(1.9)	4(2.5)	2(1.3)	8(5.1)	1(0.6)	0	2(1.3)	0	0	157(100)
対象を身体的・精神的・社会的側面から理解する能力	46(30.8)	3(1.9)	10(6.4)	0	58(37.2)	5(3.2)	3(1.9)	2(1.3)	23(14.8)	1(0.6)	0	2(1.3)	1(0.6)	0	156(100)
自己教育力 (生涯を通して主体的に学ぶ能力)	18(11.4)	0	0	0	44(27.8)	3(1.9)	14(8.9)	3(1.9)	8(5.1)	1(0.6)	1(0.6)	43(27.2)	23(14.6)	0	158(100)
自己を評価する能力	4(2.6)	1(0.6)	3(1.9)	5(3.2)	77(49.4)	22(14.1)	26(16.7)	3(1.9)	5(3.2)	0	1(0.6)	4(2.6)	3(1.9)	2(1.3)	156(100)
適切な看護目標を設定し、看護計画を立案する能力	23(14.7)	0	51(32.8)	7(4.5)	54(34.7)	1(0.6)	10(6.4)	3(1.9)	4(2.6)	1(0.6)	0	1(0.6)	1(0.6)	0	156(100)
個々の看護技術を確実に展開する能力	15(10.2)	0	2(1.3)	55(35.3)	64(41.0)	0	3(1.9)	5(3.2)	5(3.2)	0	0	5(3.2)	1(0.6)	0	156(100)
レポートを書く能力	55(34.8)	0	7(4.4)	11(7.0)	39(24.7)	5(3.1)	15(9.5)	0	0	6(3.8)	3(1.9)	14(8.9)	1(0.6)	2(1.3)	158(100)
他者の中で自分の考えや思いを発言する能力	7(4.4)	2(1.3)	11(7.0)	5(3.2)	60(38.0)	34(21.5)	22(13.9)	8(5.1)	1(0.3)	1(0.6)	0	7(4.4)	0	0	158(100)
実施した看護について要点をまとめて言語で発言する能力	5(3.2)	3(1.9)	2(1.3)	6(3.8)	31(19.7)	87(55.5)	9(5.7)	4(2.5)	2(1.3)	2(1.3)	1(0.6)	5(3.2)	0	0	157(100)
物事を論理的にとらえ、客観的に思考する能力	56(35.5)	1(0.6)	12(7.6)	2(1.3)	37(23.4)	18(11.4)	15(9.5)	1(0.6)	6(3.8)	3(1.9)	1(0.6)	3(1.9)	2(1.3)	1(0.6)	158(100)
研究を展開する能力	23(14.9)	0	1(0.6)	7(4.5)	8(5.2)	1(0.6)	27(17.6)	0	0	73(47.4)	8(5.2)	3(1.9)	2(1.3)	1(0.6)	154(100)
合計	316(15.6)	42(2.1)	143(7.1)	108(5.3)	669(33.1)	187(9.2)	167(8.3)	54(2.6)	93(4.6)	90(4.4)	16(0.8)	86(4.3)	45(2.2)	7(0.3)	2021(100)

単位=人数(%)

表4 現在大切なこととして残っていること

順位	項目	n=492
1	専門的知識・技術の大切さ	49(10.0)
2	対象を個別に理解することの大切さ	48(9.8)
3	礼儀・挨拶や言葉遣いなど基本的なこと	38(7.7)
4	対象との人間関係の大切さ	36(7.3)
5	理論的・客観的な根拠をもって看護実践すること	35(7.1)
6	看護技術の基本の大切さ	34(6.9)
7	専門職業人としての姿勢・態度	33(6.7)
8	コミュニケーションの大切さ	31(6.3)
9	対象の立場に立ち共感すること	29(5.9)
10	看護技術を対象に応じて工夫すること	27(5.5)
11	豊かな感受性を持って対象と関わること	24(4.9)
12	精神的援助の重要性	21(4.3)
13	主体的に行動すること	21(4.1)
14	自己の健康管理	19(3.9)
15	看護過程に沿って個別の援助を行うこと	16(3.3)
16	専門性を高めるため努力	14(2.8)
17	対象をありのまま受け入れること	10(2.0)
18	赤十字の理念	8(1.6)
	合計	492(100)

単位=人数(%)

(2.8%)であった。(表4)

(2) 本学卒業に対する満足

本学を卒業して良かったという質問に対して「はい」134名(84.3%)、「どちらともいえない」25名(15.7%)、「いいえ」はいなかった。

#### IV. 考察

##### 1. 卒業時点での能力や態度の習得状況に対する満足度と影響を及ぼした事項について

今回の調査で、能力や態度の習得状況の満足度が平均値3.0以上だった項目の内容は以下の2群であった。一つは、対象との関係形成、対象理解、看護上の問題の明確化、目標設定、具

体的な看護計画の立案、看護技術の実施などの看護過程の一連の要素であった。もう一つは、責任感や主体性、協調性やリーダーシップ、生涯学習の姿勢や自己を評価する能力など、看護の専門職業人としての姿勢・態度に関するものであった。

一方で、満足度が3.0に満たなかった項目は「論理的思考力」や「研究を展開する能力」であった。今回の調査では、看護過程の一連の能力に関しての満足度は比較的高かった。しかし一方で、物事を論理的にとらえ客観的に思考する能力の満足度は低かった。「看護過程には問題解決思考が必要であり論理的思考が不可欠である」<sup>5)</sup>とされているが、本学卒業生は看護過程の学習が看護過程の形式的側面の学習のみに終わっており、論理的思考は習得されていなかったのではないかと推察される。

卒業生の能力や態度の習得状況の満足に影響を及ぼしたのを見てみると、いずれの項目についても「臨地実習」が最も多く、次いで「講義」「カンファレンス」「教員」であり、臨地実習での経験や教員との関係性の中であった。これらの能力や態度の習得がなされているといえる。

臨地実習は看護実践能力を習得する授業であり学内の演習では不可能な学習である。能力や態度の習得に最も影響を及ぼしたのとして臨地実習があげられたのは、臨地実習での学習が能力や態度の習得ができるものであったと評価

できる。しかし一方で、第2報で報告した看護師になることや学業の継続を諦めようと思った際の影響として多かったものは臨地実習であった。臨地実習は本来、看護学の関心や価値を高める授業である。しかし、学生が臨地実習で「看護師に向いていないのではないかと」と進路変更を考えるような経験をしているという第2報の調査結果から、能力や態度の習得がより高められ、学生が看護師になることや学業の継続を諦めるような経験とならないような臨地実習の授業のあり方を検討する必要性が示唆された。

## 2. 研究を展開する能力の習得について

本学では、「看護研究概説」の講義で看護の現象を研究する際の取り組みや具体的な手順について教授している。研究を展開する科目『卒業研究』は開学時から5期生まで実施した。6期生から、問題・課題解決の方法の能力を効果的に養うことを目指し『卒業研究』の科目を『専門ゼミナール』に変更した。『専門ゼミナール』では学生が追求したいテーマの文献抄読やグループ討議等を行っており、現在の教育課程では『卒業研究』は実施していない。

研究を展開する能力の習得に対する満足度を『卒業研究』を履修した卒業生と履修していない卒業生と比較すると、前者の平均値が2.6で後者の平均値は2.2と低かった。このことから在学中の研究経験が「研究を展開する能力」の満足度に影響しているといえる。

また、今回の調査により、卒業生は研究の展開に対する学習ニーズをもっていたが、本学の教育では十分に習得出来なかったといえる。「看護師長は看護大卒者に『研究に関わる役割』を期待している」<sup>9)</sup>という報告もあり、「研究を展開する能力」の満足度が高まるような教育内容を検討していく必要がある。

## 3. 本学で受けた教育で現在大切なこととして残っていることについて

卒業生にとって本学で受けた教育で現在大切なこととして残っていることで最も多かったのは「専門的知識・技術の大切さ」であり、卒業生が本学の教育のなかで学んだ知識や技術を現在大切だと認識していることが明らかになった。

一方、最も少なかったのは「赤十字の理念」であった。鈴木らは「赤十字看護教育理念の満

足を得た割合は低く、赤十字の存在が学生にとって抽象的で、生活の中で身近な存在として感じられなくなっているのではないかと述べている。本学でも「赤十字精神を備えた看護師の育成」を目的として看護教育を行っているが、鈴木らの述べているように卒業生には日常とかけ離れたものとして捉えられている可能性もある。その理由として、「どのような状況でも人間の人格のより完全な肯定、最大の幸福の獲得という目的が含まれる赤十字の理念」<sup>8)</sup>は、戦争や被災状況でだけ発揮されるものではなく、日常の看護実践や生活においても具現化されるものであるという認識が学生には乏しいからではないかと考えられる。今後、赤十字の理念を日常の看護の中に具現化していける教授内容や方法を検討する必要がある。

さらに本学は日本赤十字社を設置主体とした短期大学である。「赤十字の学校で学びたかった」という動機をもち入学する学生がいる中で、「赤十字の理念」が大切なこととして残っているとしたのは8名であった。これは、学生が期待したような学習が成されなかった可能性を示している。赤十字の学校で学びたいという期待を持ち入学した学生が、期待した学習が出来、大切なものとして残るような教育内容を検討する必要がある。

今回の調査では、卒業時点で身につけてほしい能力や態度の習得状況に対する満足度が最も高いものでも5点中3.3という結果であり、満足度が高いとはいえなかった。しかし、本学卒業に対する満足については、約85%の卒業生が本学を卒業して良かったと評価している。このことは、本学の教育や学生生活に肯定的な評価をしているといえる。

## V. 結論

- 1) 卒業時点での能力や態度の習得状況に対する満足度の平均値が高かった項目は「看護過程の一連の能力」と「看護専門職者としての態度・姿勢」であった。一方、満足度が低かったのは「論理的思考力」や「研究を展開する能力」であり、研究の展開や現象を論理的にとらえ客観的に思考する能力を高める教育方法について検討する必要性が示唆された。
- 2) 卒業生の能力や態度の習得状況に対する満足に影響を及ぼした事項は「臨地実習」が最も多

- く、次いで「講義」「カンファレンス」「教員」であった。能力や態度の習得に対する満足度がより高まり看護師になることや学業の継続を諦めるような経験とならない臨地実習の授業としてのあり方を検討する必要性が示唆された。
- 3) 本学で受けた教育で現在大切なこととして残っていることの割合が最も高かったのは「専門的知識・技術の大切さ」であった。最も低かったのは「赤十字の理念」であり、赤十字の理念を日常の看護の中に具現化していける教授内容や方法を検討する必要性が示唆された。
  - 4) 卒業生の約85%が本学を卒業して「良かった」と評価していた。「どちらともいえない」が約15%で、「いいえ」の卒業生はいなかった。

#### 本研究の限界と今後の課題

本研究では、1期生は卒業から7年以上経過しての調査となった。また7期生は卒後1年未満での調査となり時期的な考慮が不足していた。また、回答者も少なく一般化する為には卒業時から継続し定期的な調査を行っていく必要がある。また、今回の調査は卒業生からの評価のみであった。今後は卒業生の就職先や教育実践・看護実践等の関係者等からの評価も取り入れ、教育環境の改善や教育方法について検討を重ねていく必要がある。

#### 謝辞

調査にご協力頂きました卒業生の皆様に感謝いたします。

#### 引用文献

- 1) 山崎祐二, 安藤祐子, 鈴木祐子: 武蔵野赤十字高等看護学院および日本赤十字武蔵野女子短期大学の卒業生動態調査－(報告1) 就業状況, 進学・研修状況, 転職・退職状況, 職業意識等について－, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 第8号, pp113-125, 1995.
- 2) 市江和子他: 日本赤十字愛知短期大学の卒業生の実態調査(その1)－就業状況・職業意識を中心に－日本赤十字愛知短期大学紀要, 第12号, pp83-92, 1999.
- 3) 高梨一彦他: 弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査(1)－調査の目的と方法および卒業生の現状について－, 弘前大学医療技術短期大学紀要, 第23号, pp1-38, 1999.
- 4) 佐々木幾美: 卒業生から見た看護系大学教育の評

- 価－問題提起と研究枠組み－, *Quality Nursing*, 4 (10), pp, 5-10, 1998.
- 5) 中西陸子: 方法としての看護過程, p137, ゆるみ出版, 1989.
  - 6) 千葉大学看護学部研究班: 調査報告書, 看護系大学を卒業した看護職者の活用・育成に対する看護管理者意識, pp35-38, 2002.
  - 7) 鈴木祐子, 安藤祐子, 山崎祐二: 武蔵野赤十字高等看護学院および日本赤十字武蔵野女子短期大学の卒業生動態調査－(報告2)－本学で受けた教育への評価、本学の将来構想への見解について－, 日本赤十字武蔵野女子短期大学紀要, 第9号, pp44-47, 1995.
  - 8) Jean S.Comite: *International de la Croix-Rouge*, 7, *avenuedelaPaix, geneve, Suisse*, 1914: 赤十字の諸原則－, 井上益太郎訳, 日本赤十字社, 1958.

#### 参考文献

- ・石井邦子: 「看護学教育の在り方に関する検討会(第二次)」を終えて－, *看護教育*, 2004(45)6
- ・一戸とも子他: 弘前大学医療技術短期大学部看護学科卒業生の追跡調査(2)－看護教育と学生生活への評価－, 弘前大学医療技術短期大学紀要, 第23号, 1999.
- ・井上仁美他: 看護系大卒者の動向と今後の課題－愛媛大学医学部看護学科の卒業状況調査から－, *看護教育*, 46(7), 2005.
- ・遠藤恵子: 山形県立保健医療短期大学看護学科卒業生の動向(第1報)－卒業生の実態と看護技術演習に対する評価－, *山形保健医療研究*, 第7号, 49-56, 2004.
- ・佐々木幾美: 卒業生から見た看護系大学教育の評価－問題提起と研究枠組み－, *Quality Nursing*, 4 (10), 1998.
- ・田島桂子: 看護実践能力育成に向けた教育の基礎(第2版), 医学書院, 2004.
- ・舟島なをみ: 看護教育学研究, 医学書院, 2004.